

# 貴州・黔靈山の仏教

鎌田茂雄

## 一 序

中国の名山の中には仏教と深い関係がある山が多い。その山を開いたとされる伝説上の菩薩によってその山は靈山、聖地となる。たとえば迦葉尊者の雞足山<sup>(C)</sup>、普賢菩薩の峨眉山、文殊菩薩の五台山、観音菩薩の普陀山、地藏菩薩の九華山などは菩薩との関係によってその山が仏教聖地となっている。また、達摩の嵩山、慧遠の廬山、慧能の曹溪山、密雲の天童山などは現実に活躍した仏教者によって山が開かれ、仏教聖地として栄えたのである。中国の西南部、貴州省にもまた仏教聖地といわれる名山がある。それは黔靈山<sup>きんれい</sup>、金鼎山、梵浄山である。本稿ではこの中の黔靈山をとりあげて、論述したいと思う。

そのためまず最初に貴州の仏教聖地・黔靈山の概況について述べ、ついで黔靈山弘福寺の現況と歴史を明らかにし、次に弘福寺開山の赤松和尚の伝記と思想を述べ、最後に黔南の禅宗の状況を示す唯一つの資料である『黔南会燈録』に現われた貴州の禅者について述べたいと思う。

## 二 貴州の仏教聖地・黔靈山

貴陽市の西北、市街区から一・五キロの距離にあるのが黔南第一山といわれる黔靈山である。

黔靈山<sup>(三)</sup>は象王嶺、檀山、獅子岩、白象山、杖鉢峰、大羅嶺、関刀岩などの群山よりなっている。

山上には古樹が多く四季を通じて緑が絶えることがないという。山中には一、五〇〇種の植物や、一、〇〇〇種以上の薬材が産出するといわれ、また五〇種以上の鳥類、獼猴が群棲しているという。風光明媚と相俟って現在では貴州省唯一の大型公園となっている。

登山道路は曲りくねって弘福寺の入口に達しているが、途中には奇岩怪石が多く、珍らしい古木が見られる。山頂近くには清の康熙十一年(一六七二)に創建された弘福寺がある。

黔靈山の背後には漏勺泉、百盈泉とも呼ばれている霊泉がある。山の前面には麒麟洞、古仏洞、洗鉢池などの古迹が多い。山の麓には現在、遊覧地となっている黔靈湖がある。

黔靈山は景勝の山であったため、清代の文人たちはこの黔靈山の石壁上に「黔靈勝景」「第一山」「黔南第一叢林」「黔南第一山」「黔中第一山」などの文字を刻したのである。

黔靈山の勝跡については『黔靈山志』<sup>(三)</sup>巻二の「勝概」の附図、山水の条を見ればよい。

靈山秀水は南海の普陀山、山右の五台山、蜀中の峨眉山、青陽の九蓮山(九華山)であり、それらの山は聖蹟、聖地と称するに値するといふ。黔靈山については次の如く述べている。

彼の黔靈は、巋然として傑出し、塵表を秀絶す。悉く西来の大意を具し、宜しく僧伽の為に供奉すべし。山水映帶し、勝境を微するに足る<sup>(四)</sup>。

黔靈山は西来の大意、すなわち禅宗によって栄えた勝境であるというのである。これを見ても黔靈山から仏教との因縁を取り除くことはできないことがわかる。以下、『黔靈山志』の記述によって往時の黔靈山について述べることにする。

黔靈山は貴陽城の西北三里余りのところに位置する。杖鉢峰が西に屹立し、その峯を廻ると、谷水の潺々とし

て山の麓を繞る音を聞くことができる。この谷川は檀山澗水と呼ばれる。西蓮峰が豁開し雲際に直入しているのが黔靈山であるという。

群峰、劍の如く峭壁をなし、通道は于廻して登らなければならない。山の入口に楊柳泉という清冽な泉が湧き出しており、さらに進むと天生石橋がある。あたりは翠竹が繁茂し、その背後にある金碧輝煌たる殿閣が弘福寺である。

寺の北に薪をとる樵夫が通れる小徑があり、烟火は稀にしかなく、雞犬の鳴声のみ聞こえる大羅木村があつたという。村の前に溪流があり、その背後に天に向つて首をもたげているような獅子巖がある。この獅子巖の下に檀山洞があり、その下の溪流が檀山澗水なのである。

宝塔峰に続いている獅子巖に対峙しているのが象王嶺である。この象王嶺に登ると貴陽の城廓を一望できるといふ。

黔靈山には、中峰、北峰、三台峰、鉢盂山、錫杖峰などの山峰がある。

中峰は毘盧閣の背後にある。そのやや左に宝塔峰がある。中峰は一山の主峰であり、長松繁茂し、千峰が周圍を繞っている。

北峰は中峰の左にあり獅子巖と互いに関連がある。

三台峰は象王峰の東南にあり、この峰の下には覆鐘山がある。

鉢盂山は獅子巖の外側にある山で錫鉢峰と相接している。

錫杖峰は象王嶺の外側にあり、鉢盂山と対峙している。

巖には獅子巖がある。獅子巖は寺の東北にあつて獅子が蹲伏しているような状に見える、その中に檀山洞がある。峭立しているため登ることはできない。

嶺には象王嶺と大羅嶺がある。象王嶺は寺の右にあり、頂上に双石があるが、この嶺は象のようであるので象王嶺と呼ばれて、獅子巖と相對峙している。

大羅嶺は山の西北に十余里にわたって盤廻しており、その最高処から、上は清鎮を望み、下は竜里を望むといわれ、黔雲山中の「貴山富水」と称せられている。

泉には生生泉と聖泉がある。生生泉は山の左傍にあり、冬温にして夏涼、涓涓として水の音が絶えることがない。寺の飲料水はこの生生泉に頼っていた。この泉の上には石壁が屏の如く屹立し、その下に池塘がある。この池の水は流れ出して灌漑に利用されている。

聖泉は漏酌泉とも百盈泉とも呼ばれている。この聖泉について、貴州巡撫長白愛必達撰の『黔南識略』巻一では、

漏酌泉は黔靈山の後に在り。其の泉、晝夜盈縮し、百を以て度と為す、名けて聖泉と曰う。亦た百盈と名くと述べられている。この聖泉は山の後、二里ばかりのところにある。甘美なること他の水とまったく異なるという。水上に亭が建てられている。

井には楊柳井がある。寺の前の入口から三百余歩のところにあつて、山から溪流が流れており、味は甘美で井の上に柳樹が生えている。

澗には檀山澗と北澗がある。檀山澗は、獅子巖の下にあり、錫杖峰、鉢盂峰の下を繞つて省城の西廓に達している。

北澗は大羅溪水とも呼ばれているが、鳳凰関の下で屈曲し、山の後で盤繞している。潭には翠竹竜潭と称する潭が寺の前方二百余歩のところであり、竹蔭がこれを覆っている。水は清冽であるという。

以上、『黔靈山志』の「山水」の条によって、かつての黔靈山の状況を記したのであるが、明末から清初にかけての黔靈山が景勝地であったことがわかる。この景勝地に來山し寺院を開いたのが赤松和尚であった。

### 三、黔靈山弘福寺の現況と歴史

黔靈山弘福寺は赤松和尚（赤松道領、潼川韓氏、一六三四—？）が創建した寺である。清の康熙十一年（一六七二）春、赤松和尚は杖を策して黔靈山に來た。万峰環繞している黔靈山を見て心から歎息した。早速入山して信者の喜捨によって草庵を結び、この寺を修建するに至ったという。

赤松和尚は黔靈山の中の杖鉢峰、宝塔峰、象王嶺に囲まれた凹形の地勢を見て、その場所を立寺のところで定めた。この地は第四紀の氷河期の遺迹であるといわれる。入山以来、六年間を経過した康熙十一年（一六七二）、弘福寺が創建された。その後、三十二年の努力によって梵刹が完成したのである。

弘福寺は中軸線上に山門殿、天王殿、觀音殿、大雄宝殿、藏經樓が並び、その両側に方丈苑、尊客寮、如意寮、禪堂、雲水堂、戒堂が配置されている。常住僧の多い時は百余名に達し、まさしく貴州の首刹の位置を占めた。

民国時代には貴州仏教会の所在地であり、民国十八年（一九二九）には、果瑤法師が貴州仏学院を創建した。新中国成立後には、懷一法師が寺務を行い、自ら耕作して生活し、頭陀行を修した。

弘福寺は建立以来、三百年以上もたつが、弘福寺の發展の歴史の上で最大の貢献者は、現方丈の慧海法師であるといわれる。彼は一九八七年、住持となつてから、僧侶は四散し、殿宇は荒廢し、山林は荒れ果てていた弘福寺を自己の資産などを投げうって、殿堂を修復し、山門を改建し、新たに藏經樓、五冠堂、禪堂、方丈苑、九竜浴仏石壁（石雕）などを造築した。

藏經樓についていえば、その外觀が雄偉壯觀であるのみならず、内容も充実、その中には『乾隆大藏經』七千

二百四十卷、『中華大藏經』八十卷、『大正大藏經』八十五卷、『房山石經』二十三卷、『仏藏輯要』四十一卷などが收藏されている。現在建造されつつある五百羅漢堂も大工事であるが、この工事が落成すれば貴州仏教界の最高の殿堂となるという。

慧海法師はまた僧尼の人材養成に意を用い、貴州尼衆仏学院、貴衆僧伽学院を復興し、十余人の僧を外地の仏学院に送って学習させた。さらに貴州全省の仏教寺院の修復に努め四十万余元余りも資金を援助したという。

現在、弘福寺は貴州省最大の寺院となり、貴州省仏教協会の所在地になっている。慧海法師は貴州省仏教協会会長、中国仏教協会常務理事、貴州省政協委員、貴陽市人大常委、弘福寺方丈の要職にある。弘福寺は國務院が公布した一四二ヶ所の全国重点寺観の一つに指定されている。

弘福寺の山門の石碑坊には、中国仏教協会主席であり書法家として有名な趙朴初会長の「黔南第一山」の金色の文字が鮮やかである。また大雄宝殿には釈迦仏と十八羅漢や弥勒菩薩、観音菩薩が祀られている。

中央の主建築の左側には曲尺亭、画廊、月池、素食館などがあり、弘福寺の外には、赤松和尚らの塔群、生生泉、月明池、木亭、石亭、望城台などがある。

弘福寺の三面は山に囲まれており、緑の樹木の下に殿、塔、亭、閣などが見え隠れしており、特に早朝には霧が漂い、縹縹緲緲たる風景を見せてくれる。まさしく弘福寺こそ貴州省の冠であり、貴州第一の大禪林ということがができる。

次に『黔靈山志』巻三の「寺院」の条に述べられている草創期の弘福寺の各殿宇の状況を述べよう。

仏殿は督学趙公などが赤松和尚が草庵を結んでいた時、山の高所は狭いので寛平なところに仏殿を建てることを師にすすめ、それによって仏殿が建立されたという。後山が崩れて古木の大材があったので、その大材によって横幅、奥行き十柱よりなる大殿が完成したという。

観音殿は五間ばかりであったが、兵乱の最中に修理が行われ、平撫軍曹公夫人魏氏の私財の寄進によって完成した。

経楼は五間あったが、清の康熙二十三年（一六八三）冬、国家が滇黔地方を平定した時、総制蔡公、撫軍楊公らが入山して赤松和尚を訪ねた。蔡公が和尚に、この山の叢林は大へん良いが、左右の山が太だ高く、その反面叢林があまりに低すぎるので、高閣を建てた方が良く、われらが師を共にこの功德事業を完成させたいと言上した。彼らの資金援助によりまず経楼が落成した。

経蔵には四つの経龕が置かれた。なお経楼下の三間に座が儲けられて法堂としての機能が整えられ、そこで説法、伝戒が行われた。

経楼の高閣の下の左右には廂楼が設けられた。廂楼は各三間、信徒の供養によって完成した。上は経楼に接し、下は中殿に接している。

正殿の左右の廂房は各五間、赤松和尚の頃には齋堂、客堂とされていた。その他の廂房は禅寮であり、上は中殿に接し、下は前殿に接していた。

法堂は三間計りで、大殿の右に在った。藩憲蔣公らが財力を提供し、憲伝公が楫を造り、貴西道高公が龍の彫刻を寄贈した。法堂の中には諸公の額联がある。

天王殿は五間で、観音殿の前面に在った。正黄棋都統薩頼が中心となって創建、後に督標中営劉・営孫の二公、並びに都圖曹公が拠金して助成した。左に関帝像祠がある。

大殿の前には厨庫倉があった。

次に草創期の弘福寺の仏像について述べよう。仏像についての記載は『黔靈山志』巻四にあるので、それによりながら概観しておきたい。

毘盧仏像は身高六尺六寸にして、大中丞曹公、魏夫人らが発心し拠金して雕造したものである。その龕卓、爐瓶、帷幌、旛幢、花供などは臬司げっし(明清時代の按察司)李公が修造した。傍にある韋馱天一尊は楚僧月航が滇(雲南)より招来したものである。

釈迦如来像は僧月航が滇より募化したものであり、二菩薩像は楚林師が募造したものである。龕座は居士李正芳と室の劉氏が助製したもので、撫軍曹公と提軍候公の題額がある。

観音大士像は信者の李維相と室の田氏が裝修し、藩司潘公超先、督学趙公景福が題額した。

韋馱尊者像は善信士の張延英が裝修、左右の両棚は大司馬范公らが造った。

天王像は藩臬道将らが拠金して裝修した。

弥勒仏像は僧月航が招来した。今は天王殿に安置している。

黔靈山弘福寺の歴史を記したものに『黔靈山志』巻六に収録された大司馬王公繼文が撰した「黔靈山弘福寺記」と、同巻十一、「芸文上」に収録された賜進士第資政大夫貴州等処承宣布政使司布政使内陞京堂蔣寅撰の「黔靈山弘福寺碑記」とがある。

まず「黔靈山弘福寺記」から検討しよう。撰者の王繼文は『清史稿』巻二百五十六、列伝四十三に伝があるが、王繼文は字は在燕、漢軍鑲黃旗人。順治中(一六四四―六一)、官学士より弘文院編集、戸部郎中を歴、康熙中(一六六二―一七二二)、呉三桂の平定に従い、雲貴総督になった。

清の康熙三十年(一六九一)、王繼文は滇南を重撫したが、その翌年、大司馬范公が黔州を巡視して帰り、王繼文に次のように告げたという。黔靈山は新しく開いた名勝地であり、その工事はすでに竣工し、住持の僧から寺記を請われたのでここに撰するという。

黔靈山は貴陽の西北隅五里にあり、千巒拱翠、一水拖藍の景勝の地であるが、その地に卓錫した禅師を赤松と

いい、臨濟宗の人である。赤松は蜀より楚を歴てこの地に留まり招提を造った。その後、制軍蔡公、撫軍楊公、慕公、提軍侯公らの貴顕名士が弘福寺の拡張に努めた。その後、王継文らが復興に努めた。かくして立派な層楼楔閣、曲檻長廊、亭院齋舎が完成したという。

『黔靈山志』卷十一の「芸文」に収録された「黔靈山弘福寺碑記」も王継文撰の「黔靈山弘福寺記」と大同小異であるが「黔靈山弘福寺碑記」の方が諸殿宇建造の拠金者の人名が多いが、繁を恐れて省略したい。

#### 四、赤松和尚の伝記と思想

赤松和尚の伝記に関する資料としては、『黔靈山志』卷一に収録されている「行実」、二卷に収録されている「黔靈赤松領禪師塔銘」、及び『黔南会燈録』<sup>(六)</sup>卷二に収録されている「貴陽黔靈赤松領禪師」の条などがある。

松山無動居士蔡珽が撰した「黔靈赤松領禪師塔銘」及び『黔南会燈録』卷二に収録された伝記によって赤松和尚の伝記を述べておきたい。

赤松和尚の諱は道領、字は赤松、赤領禪師ともいわれた。蜀の潼川（四川省涪江流域）の韓氏の子である。母は謝氏、乱世のために黔に入った。十五歳、自ら喜んで出家、遂に南望山に入った。南望山は貴州省息烽県の東にあり、海拔一七四九・六メートルある山勢雄偉の山で頂上に玄天洞がある（『中国地名詞典』上海辞書出版社、一九九〇年四月、六一八頁）。なお南望山については『貴陽山泉志』（『説郛』三種）の中に記録があり、「南望山は府城の北なり、深林大箐にして嵐気あり。昼昏く人跡罕に到る」と記している。

南望山で修行すること数年、九峰山（福建省南平市、宋代に延平書院あり）に到り、靈藥和尚<sup>(七)</sup>に参じた。靈藥和尚は「万法帰一」の公案を赤松に示した。「万法帰一」とは、唐の中頃、僧肇の撰述とした偽作された『宝蔵論』<sup>(八)</sup>にある言葉で、差別の万法が平等一味の理体に帰入するということである。ちなみに『碧巖録』第四十五則

に「趙州方法帰一」の公案がある。

その後、白雲西識(元)を礼して披剃し、敏樹和尚(二〇)に参じて發明した。敏樹和尚とは敏樹如相(一六〇三—一六七二)のことで、『黔靈会燈録』巻一に伝がある。如相の語録としては『敏樹禪師語録』一〇巻があるが、この語録は道崇の編、道領の録したもので、清の康熙二十七年(一六八八)、嘉興楞嚴寺で刊行している。

『黔南会燈録』巻一に「石阡三昧敏樹相禪師」の伝が収録されているが、それによると、敏樹は蜀の潼川王氏の子であり、赤松和尚と同郷の出身である。破山和尚に狗子無仏性の話頭で参じて証悟した。敏樹は黔蜀を往来すること数十余年、清の康熙十一年(一六七二)、蜀の慈雲堂で示寂した。その遺偈は「我為法王、於法自在、來去自由、縱横無礙」(中統藏一四五・七四六上下)というもので、その自由無礙の境界がよく表われている。

敏樹和尚に参じて印証を受けた赤松和尚は三年間の閉關を行った後、黔靈山を開いて行化すること三十余年、その道風は黔地に振い、法を得る者、数十人という。

赤松和尚には『語録』五巻がある。それは『赤松禪師語録』といい、門人寂源が録し、康熙三十年(一六九二)に刊行したものである。本語録は臨濟宗、敏樹如相法嗣の、赤松道領の語録である。上堂・小参・示衆・法語・拈頌・偈・雜著・詩・書問・仏事・行実を集録したもので、『中華大藏經』第二輯第一百五十五冊、嘉興統藏目錄の中に「清道領説・寂源録」として収録されている。

『中華大藏經』本には清の法秀撰の「序」、および清の殷弼書の「序」が冒頭にある。『語録』の内容は次の如くである。

卷一 上堂

卷二 上堂、小参、示衆

卷三 法語、拈頌、偈、雜著

卷四 詩

卷五 書問、仏事、行実

卷一には「住貴陽府寿世禅院語録」と題されて上堂の法語が収録されている。上堂とは法堂に上り説法すること、堂は法堂のことである。古くは毎日朝晩行われたが、後には四節上堂、五参上堂など定時の朝行われた。朝参、大参、普説、陞座などの説法がある。卷一で上堂を請うた人々には、鬢髮李浄道、黎浄願居士、李鎮台、浄月李居士、白檀越、綏遠將軍蔡公、撫軍王公大檀越、大中丞慕公、藩憲柯公、閑台杜公、撫標大廳能公、城守中軍安公、省参禅師、威清門衆居士、広東街明魁黄居士、浄祥蘇居士、浄尚陶居士、穎川、松巖二大師らの大檀越、居士、貴顕、禅師、大師らがあった。

卷二において上堂を請うた人々には、憨拙禅師、劉檀越、林浄徒等の居士、広東街楊梅居士、陳士衍居士、松月上座、浄敵劉居士、張浄輪、芳斌朱居士、傅居士、致中禅人、藩憲柯大檀越、副台王公、嵩巖大師、行周監院、李鎮台、藩台柯公、王鎮台、臬憲曹公、嵩巖大師らがあり、卷末に「示衆」十二首がある。その中の二首をあげよう。

六根清浄更精勤。一念渾然超劫塵。莫向外辺尋仏果。单求自己本来人。

六根清浄にして更に更に精勤せよ。一念渾然として劫塵を超ゆ。外辺に向つて仏果を尋ねること莫れ。単に自己本来の人を求めよ。

乾坤收在一掌中。放出円明満太空。而今不知何若此。看来天地体皆同。

乾坤一掌の中に收在す。円明を放出し太空に満たす。而今、知らず何ぞ此の若きを、看来れば天地の体、皆同じことを。

前の一首は六根を清浄にして更に精勤することを述べている。一念発心すれば、長い間の塵勞を超越することができる。悟りを外に向って求めてはならない。自己自身の中にそれを求めよと説いている。

後の一首は、乾坤大地はこの掌中にある。円明の気を放出して虚空に遍満させなければならぬ。この只今こそ、それが現成しているのだ。よく見れば天地の体も自己も虚空も全く一体なのであるという。

この二つの示衆を見ても、赤松和尚の只者でなかった境涯がわかる。それは虚空とともに生きた禅者の風格である。彼が若い時、九峰山で五年間の閉関をしたことがこのような氣力を充実させた禅者たり得たといえよう。ちなみに閉関とは、門を閉じ、一切の來客を断つて修行のために隱棲することである。食事も外部から運んでもらい、一步も庵室から外に出ることなく、ひたすら坐禅や読經に没頭することをいう。

『黔靈赤松領禪師語録』卷三には「法語」が収録されており、示大中丞王公、示我和関大檀越、示西星白檀越、示知參魯居士、示昭然禪人、贈間庵淨敵居士、示仏燈禪人帰里、示孫演密、示融之禪人、示繼脈監院、示至賢善人、示慈容善人持咒、示碧松禪人、示大潤居士が収録されている。

次に「拈頌」として女子入定、勘破婆子、婆子燒庵、撒手而帰などの公案が収められている。

次に「贈偈」があり、それは贈仏燈禪人、贈慈忍禪人、贈松庵禪人、贈鶴声監院、贈嵩岩大師、贈良遂更号仏遂、贈憨拙禪師、贈海雲禪人、贈大之大德、みん眼大林禪人、贈鶴樹禪人、贈天台省參禪師、示懷元侍者、示震南侍者、示嶽雲侍者、示宝印禪人、示黔谷禪人、示泰寧禪人、示泰然禪人、勉実參禪人、示可也禪者、勉達也禪人、贈悟空禪人、贈宝月禪人、勉帰元禪人、贈瑞徴楊檀越、贈竜庵居士、勉従仏居士、勉心宗居士、贈公夏詞宗、贈淡也喩詞宗、眼師吉居士、贈善権居士、贈浄円善人、贈仏月居士、勉浄月居士、贈浄孝居士、贈李公大檀越、示燦明居士、贈浄敵居士、示仏意居士、答仏宗大徳拈花曹溪意旨、示瑞貞居士、贈宗明居士、示仏貞居士、贈紫岩居士、勉修來居士、贈靈源居士、贈祇園居士、贈大幢居士、贈聖林居士、勉賢林居士、勉子穎居士、示双林善人、

勉慈願居士、示義月居士、贈円慧善人、示超元浄玉居士、示浄富居士、示仏賢仏悦居士、示眞慈居士、贈鳴佩冉  
詞宗贖名、勉純素居士、贈明遠詞宗、示靈然居士、贈昇寰居士、示顯枝居士、示王官堡衆居士、贈来源居士であ  
る。

これを見ると、多くの居士、禪人などに法語を贈っていることがわかる。これらのなかに「勉賢林居士」など  
と「勉」という字があるが、これは勉勵せよという意味がある。たとえば雲門宗の宗祖である雲門文偃（八六四—  
九四九）の遺誡<sup>(二)</sup>を見ると次のように述べられている。

汝、当に知るべし。或は能く吾が誠を遵行せば、則ち仏法をして流通し、天神、撰衛して、四恩に負かず、  
世に益有らしむべし。或は此に違わば、吾が眷属に非ず。勉旃<sup>べんせん</sup>せよ、勉旃<sup>べんせん</sup>せよ（『雲門匡眞禪師広録』卷下）。

この一文の意味は「どうか次のことをよく知ってもらいたい。自分の遺誡をよく守れば仏法は末代まで流通し、  
天神の加護が得られ、四恩に背くことなく、世に役立つであろう。もし、自分の遺誡に背けば、自分の眷属では  
ない。よく勉強せよ、よく勉勵せよ」ということである。恐らく『赤松領禪師語録』卷三に収録されている「勉」  
の字は『雲門広録』と同じく「勉旃<sup>べんせん</sup>」の意味ではないかと思う。

たとえば勉賢林居士に与えた一句を次にかかげよう。

念頭提起時相對、不比尋常身口意。仏口仏心行仏事、自然超入如来地。

念頭提起する時は相い対するも、尋常の身口意に比べられず。仏口仏心行仏の事にして、自然に如来地に超  
入せん。

この意味は、念頭に起る時は、あらゆるものが相い対して起っているものである。しかし、仏の身口意は尋常  
の身口意と比較を絶するものであり、身口意はそのまま仏口、仏心、行仏となるのであり、かくして自然に如来  
地に超入することができるという。

次に「雑著」が収録されている。この中には参禅偈、念仏偈、掛鐘、布袋和尚、天童密祖、双桂師翁、慈雲老和尚、繼岐山何居士、天童掃密雲悟祖塔、慈雲掃先和尚塔がある。

このなかの「念仏偈」では次のように述べられている。

### 念仏偈

参禅共念仏両処、一心居了却心頭事。閻王不奈渠念仏与参禅和融一処。看渾然方及第自在、即還天参禅念仏  
眞実。坐断両頭居一。忽然看破娘生輪廻生死了畢。

参禅と念仏共に両処なれども、一心に居し了らば却つて心頭の事なり。閻王、奈渠念仏と参禅と一処に和融せざるや。看よ渾然として方に自在に及第すれば、即ち天に還りて参禅と念仏は眞実なり。両頭を坐断して一に居す。忽然として娘生の輪廻を看破して生死了畢す。

参禅と念仏は二つのものであるが、それは一心の事である。閻魔王が念仏と参禅を一に和融しないのは誤りである。自在の境地に入れば、参禅と念仏はどちらも眞実であることがわかり、参禅と念仏の二つを坐断して、生まれつきの輪廻を断じて生死の一大事を悟ることができるといふ。

念仏と参禅をひとつとみる禅淨一致の思想にもとづいた偈文であるが、念仏と参禅を坐断して一眞実を悟了するといふ臨濟禅者の気魄がこの「念仏偈」に現われているのではないか。

次の『語録』巻四は赤松和尚の詩文が収録されている。法秀の「序」によると、赤松和尚は士大夫と詩文を誦唱していたという。林泉隱逸の士でなければ、このような詩文を作らなかつたのである。

その詩題には、夏日滇中同友遊太和宮樹下、挽澹余曹老先生、春日送別魯公佟檀越、答孟陽熊檀越登山韻、贈別金檀越、次下司馬遊東山韻、贈臬憲高護法采陞、次譚牧州魚声韻、同友人賦得月下聽溪声、復史春元問道韻、次登山韻、送中丞曹公樞帰値雨有懷、友人至山題以贈之、送別在臣楊檀越遷楚黃郡丞、咏桂贈友、贈遊山客、誦

夏孝廉韻、春日間詠、友人過訪賦贈、次用春元夜賞菊韻、春日次酬張詞宗過訪不遇韻、贈別乾御一乘二禪人、同友人登大悲閣望武侯祠などの外、四十四首の詩文が録されている。

檀越、禪人、和尚、士大夫などの酬詩のみでなく、自然の風景を詠んだ「菊」「春日」「花朝」などの自然詩もある。たとえば「春日」の詩は次の如くである。

春勝山川緑。連天風雨速。隔林聽曉鐘。破霧鳥声出。

春勝さかんにして山川緑なり。天に連なりて風雨速し。林を隔てて曉鐘を聴く。霧を破りて鳥声出づ。

黔靈山の春の風光がよく詠まれている。春、山川は緑に覆われ、風雨に打たれている。林を隔てて曉の鐘の音を聴いたり、朝霧を破る鳥の声を聴いているのどかな山寺の朝が詠まれている。

最後の『語録』巻五には「書問」が収録されている。その書問の題には、復祇林羅居士、復張真元、復剖元書、謝制軍蔡大檀越、謝撫憲王大檀越、復張経公、復王鎮台、寄法兄天隱和尚、復白檀越、寄博達法兄、謝九峰毘中和尚、復客間閱藏經書、法叔丈老和尚啓、寄寢堂大師、寿王撫軍啓、示文一法孫などがある。この中の「復」とあるのは報答であり、答書をいい、「謝」は礼を言うことであり、「寄」は寄信であり、手紙を送ることをいう。『語録』巻五の巻末には「仏事」と「行由」が収録されている。「仏事」とは亡僧や亡檀越のための仏事であり、例えば「心持和尚の為に龕前上供」「白雲西老和尚の為に起龕」「西竺和尚のために入龕」「越檀越恭人の為に起棺」などである。

最後の「行田」と題されたものは赤松和尚の行歴を述べたものである。九峰山における「万法帰一、一帰何処」の公案修行などの状況が述べられている。

最後に黔靈山の法脈を付嘱された者について述べると『黔靈山志』巻八の「付嘱」の条に、湄・巴の鳳凰山で開法した大拙明霞、滇省大理府の文殊寺で開法した若虚明実、行周常密、楚の平溪紫氣山に住した雲石海源、省

拙浄定、雞足山金頂の迦葉殿に住した覚賢、平越に住した靈鶴唯億の名が掲げられており、さらに首座となった乾御弘源、座元となった瞿脈浄和、および岐山浄林何居士の三人の伝が収録されている。

### 五、『黔南会燈録』に収録された貴陽の禅者

『大日本統蔵経』の中に『黔南会燈録』八卷(市統蔵経一四五、以下『会燈録』と略称)という書物が収録されている。本書は善一如純の著である。従来の伝灯録が多くは江浙(江蘇省・浙江省)諸省に居住した人達のもので、黔州(貴州省)におけるものは全く収録されていないことから、著者自ら黔州の諸都を遍歴して、明より清代に至る黔地諸家一一九人の語録を収集し編録したものである。

卷首に清の康熙四十一年(一七〇二)十二月の程春翔の序、翌四十二年(一七〇三)八月の杜臻の序を収録し、次に自序並に凡例、目錄を収め、第八卷の終りに編者たる善一如純の機縁、語要を録している。「統補」では、更に聖可玉の法嗣、統燈、無瑕の二禅師、及び璧林門法嗣の心性禅師の三名を録しているが、これは後人の添加したものといわれる。

『黔南会燈録』の著者、禅一如純(生没年不詳)は黔(貴州省)習安の人で、俗姓は張氏。十七歳、法海寺の靈光を礼して披剃した。雲鷲山の頂相和尚を礼し受具して後、天台月峰に参じ、のち松嵐山に上り善権達位を礼してその法を嗣いだ。善権の寂後、一〇年諸方を遍遊し、天竜山普徳寺に開法し、さらに松嵐山普光寺に住し、その後、普徳寺に再住した。康熙四十二年(一七〇三)『黔南会燈録』八卷を著した。なお善一如純には『善一純禅師語録』三卷、『善一純善師統録』一卷がある。

『善一如純語録』の超嶼の序(二二)によると、かつては黔地に仏法なしと聞いているが、今は黔地に仏法なしとは云えないという。如純は黔の人である。呉・越・楚・蜀を徧参し名望の宗匠より教えを受けて黔に帰るや、習安の

道俗は、翕然として如純を推戴したという。如純は法を善権位より得、善権位は月幢了を嗣ぎ、月幢了は丈雪醉を嗣ぎ、丈雪醉は破山明を嗣ぎ、破山明は天童悟を嗣いでおり、その源流は清潔にして一大叢林の繁茂となつて栄えたという。

善一如純の法系をたどると、天童円悟、破山海明、丈雪通醉、月幢徹了、善権達位、善一如純となる。

天童円悟（一五六六—一六四一）は号は密雲、常州（江蘇省）宜興の人。二十九歳、幻有正伝に従つて祝髪。

万曆三〇年（一六〇二）、常州竜池院の監院となる。一日銅棺山を過ぎて豁然として大悟した。三十九年（一六一一）二月、四十六歳にして正伝の衣鉢を嗣いだ。天啓三年（一六二三）天台山通玄寺に移り、四年三月、嘉興（浙江省）海塩の広慧寺に移り、崇禎三年（一六三〇）三月、福州（福建省）の黄檗山万福寺に住し、さらに明州（浙江省）育王山広利寺を経て天童山景德寺に移る。崇禎十四年（一六四一）金陵大報恩寺に住した。同十五年通玄寺に帰り七月七日示寂した。世寿七十七。（『五燈嚴統』卷二四、『五燈全書』卷六四）。

破山海明（一五九七—一六六六）は号は破山。蜀（四川省）の人。十九歳で出家。破頭山に数年住し、博山元来に参じてのち、密雲円悟に参じてその法を嗣いだ。崇禎二年（一六二九）嘉木（浙江省）の東塔に住し、その後、諸方の寺刹に住した（『破山禪師年譜』、『五燈嚴統』卷二四、『五燈全書』卷六五）。

丈雪通醉（一六一〇—一六三九）は字は丈雪、内江（四川省）の人。落髮後、密雲円悟に参じた。具戒の後、万峰の破山海明に参じて印可を受けた。康熙二年（一六六三）成都（四川省）の昭覚寺に住した（『黔詩紀略』卷三一、『正源略集』卷五）。

ちなみに『黔詩紀略』卷三二に「丈雪大師通醉十七首」と題して、寄雪臂兄、万竹道中、避兵有感、游紫霞山觀古仏地坐有感、山居二首、示惟乾禪人二首、示知非禪人、送半偈禪人、示水心禪人、次太崑何居士韻、示大吼禪人、臥雲庵、汀声、石頭山、山居などの詩が収録されている。通醉が僧人でありながら詩人であったことがわ

かる。

月幢徹了(一六一四—一六六六)は蜀の重慶の人。宝山によって剃髮。破雪や象崖性珽に参じた後、丈雪通醉に印可された。後、滇(雲南省)の静陰・南明・竜泉・玉泉等に歴住した(『錦江禪燈』卷一三、『黔南会燈録』卷三、『五燈全書』卷八八)。

善権達位(一六一八—一六八四)は楚北の人。十三歳の時父母を失い、のち安順府(貴州省)の観音洞に太虚和尚を礼して出家した。後、月幢徹了の印証を受け、安南の万寿寺、普安(貴州省)の松熾寺等に歴住した(『黔南会燈録』卷六)。

陳垣は明末における黔南の法系表を(二三)かかっている。その法系表には百二十一人が収録されているが、系統がはっきりしない七人以外は、破山、浮石、木陳、漢月の四派で皆、天童悟の法孫であるという。その中の僧の出身地については黔の出身者のみでなく、蜀の出身者が最も多いという。

陳垣によれば、『黔南会燈録』に収録された黔僧の中では、蜀人が十中の七、八を占めており、それは『雲南阮志』に収載された「仏釈」の中の僧の中で、滇南に遊方した僧では蜀僧が多いのと同じであるという。仏教史において蜀(四川省)と滇(雲南省)、黔(貴州省)は密接な関連があったことがわかる。

以下『会燈録』の中に記載された多くの黔地で活躍した僧の中から、現在、貴州省の省都であり、黔靈山のある貴陽において活躍した僧を選び、その伝記を紹介したいと思う。

黔靈山弘福寺の法系は、弘福寺に記録された資料があったと思われるが、現在の段階では弘福寺の法系図を見ることができないので、明末から清初にかけて活躍した貴陽に住した僧の伝記を調査する以外方法がない。そこで唯一の貴重な資料として残されている『会燈録』を用いて、貴陽における僧人の活躍状況を述べたいと思う。

貴陽の僧人たちは必ず黔靈山の仏教に多少なりとも影響を受けたか、あるいは与えたのではないかと思われる

からである。

### 祿藜覚甫

破山海明、密雲円悟の法を嗣いだ臨濟宗の弟子には、象崖性珽、敏樹如相があるが、この敏樹如相の法系の中には、貴州で活躍した石阡中華天隱道崇、思南中和天湖正印、思南安化顥秀真悟、安順長寿天語懷、江口香山聖符道越、貴陽興国祿藜覚甫、貴筑華光聖圖道行、偏橋雲台浄空性明、貴陽黔靈赤松道領、偏橋福雲天機道通、天吼廓などがあるが、これらの僧の中で貴陽で活躍したのは弘福寺開山赤松道領と祿藜覚甫の二人である。

祿藜覚甫の伝は『会燈録』巻二にある。覚甫は蜀の張氏の子である。黔地において披剃、梵行和尚より具足戒を受け、ついで敏樹和尚に参じて印証を受けた。仏誕日上堂、元旦示衆などの法語が録されている。

赤松道領の法嗣には、湄潭鳳凰大拙浄霞、貴陽雲石明源、黔西乾御宏源がある。

### 鏡天宗照

敏樹如相の嗣法者である天吼廓の弟子に、習安玉丹語聖弘正があるが、その弟子に貴陽玉竜鏡天宗照がある。

宗照の伝は『会燈録』巻七の語聖正禪師法嗣の条下に収録されている。宗照は本郡王氏の子、母は陳氏。貴筑の蓮花寺において披剃。『禪関策進』を閲し無字の公案を参究した。語聖和尚より得法後、貴州の玉竜に弘法寺を開いた。

### 大慈悟度

破山海明の嗣法者の一人で貴州で活躍したのが安順静楽靈隠印文である。印文は貴州の安順府静楽庵に住した。この印文の法系には貴陽で活躍した人が多い。

大慈悟度の伝は『会燈録』巻三の靈隠文禪師法嗣の条下に収録されているが、伝記はまったく不明であり、上堂の法語のみが掲載されている。

### 梅溪福度

靈隱文禪師法嗣の下に貴陽東山梅溪度禪師がある。『会燈録』卷三によると、梅溪福度(一六三七?)は西蜀氷川、張氏の子、母は呉氏。父とともに黔地に入って東山の知如和尚を礼して薙髮、濶浪和尚の下で受戒し、その後、礼隱和尚の下で具定戒をうけて印証を受けた。滇・黔で開法行化した。嗣法者に貴陽東山紹南真解と習安南山法甫照潤らがある。語録として『東山梅溪禪師語録』一〇巻があり、「語録附」の中に「行由」があるので詳細な伝記がわかる。彼は二十五歳、黔の寶堡觀音寺に到り、靈隱文の付嘱を受けた。はじめ蓬萊永興院に住し、ついで康熙七年(一六六八)忠義院、同二年(一六六三)安竜華光寺、雲南蒙化府等覺寺、同一五年(一六七六)玉閣院、同一八年(一六七九)宗州觀音閣、同一八年(一六七九)普安県(四川省)円通寺、同三二年(一六九三)安竜吉祥庵などに歴住したという。

### 霞章海偉

梅溪福度の嗣法者の一人、貴陽霞章海偉の伝は『会燈録』卷六の梅溪度禪師法嗣の下にある。霞章海偉は思南劉氏の子。東山梅溪和尚を礼して薙髮。具足戒を受けた後、靈隱老人に参じたが、靈隱は梅溪和尚に師事するようにすすめた。海偉は梅溪の下で修行、その後、滇・黔を来往すること数十余年、監院職に任ぜられた。

### 紹南真解

貴陽東山紹南真解の伝は『会燈録』卷六の梅溪度禪師法嗣の条下にある。真解は湖南永都の唐氏の子。乱世のため黔に入り觀音寺に寓し、霞章を礼して剃髮、梅溪老人の侍者となり、具戒の後入室し開悟した。

### 指月爍吼

安順静楽靈隱印文の嗣法者の一人に密参山があるが、その弟子に貴陽指月爍吼しゃくごがある。彼の伝は『会燈録』卷七に密参山禪師法嗣として収録されている。爍吼は滇の曲靖の許氏の子。本郡天竺寺において覺悟和尚を礼して

剃髮、密山和尚に参じて印可を受けた。

### 普濟大闡

遵義禹門丈雪通醉の門下に安籠玉泉月幢徹了があり、その門下に普安松巖善権達位があり、さらにその門下に貴陽觀音濟大闡がある。

普濟大闡の伝は『会燈録』卷八の善権位禪師法嗣の条下に伝せられている。大闡は安南陳氏の子。松巖善権和尚より心印を受けた。

### 語嵩伝裔

破山海明の嗣法者の一人に雪臂巒があるが、その弟子に貴陽西山語嵩伝裔<sup>えい</sup>がある。

語嵩伝裔の伝は『会燈録』卷二の雪臂巒禪師法嗣の条下に収録されている。伝裔は西蜀宋氏の子。幼にして父母を喪い祖母に育てられた。二十三歳の時、祖母が没したので、本境の白鶴庵において性空老宿に礼して出家した。破雪和尚より具戒して服勤すること六年、後に重慶の長破杲和尚の印可を受け、さらに黔に入り雪臂巒の法を嗣いだ。後、黔の牟尼山報国寺、關西山伝法寺、鼎州（湖南省）徳山の乾明寺などに歴住した。没するや西山鳳凰池畔に塔が建てられた。

### 宗風仏定

語崇傳裔の法嗣の一人に貴陽西山宗風仏定がある。

宗風仏定の伝は『会燈録』卷五にある。思南（貴州省）任氏の子。二十三歳、都勻觀音寺の峰池和尚より祝髮、諸方に遍参し、楚の瀉山養拙和尚を礼したが、機縁契わず、江浙へ行き、天童へ行き密祖に参じたがまた契わず、病によって郷里に帰り南望山に住し、後、語崇和尚より印証を受けた。西山において円寂、本山の西に塔が建てられた。

### 実行慧真

貴陽西山宗風仏定の嗣法者に貴陽西山実行慧真と貴陽西山無滅慧穎がある。

実行慧真の伝は『会燈録』巻七の宗風定禪師法嗣の条下に伝せられている。慧真は西安葛氏の子。宗風和尚を礼し剃髪し具足戒を受け、さらに印証を受けた。

無滅慧穎の伝は不明であり、宗風和尚の印可を受けたのみとある。

### 蒼竜道語

語嵩伝裔の嗣に貴筑双高眉仏海があり、その嗣に貴陽慈雲蒼竜道語がある。

蒼竜道語の伝は『会燈録』巻七の嵩眉海禪師法嗣の条下に伝せられている。

蒼竜道語は江南、陸安長氏の子。黔の西山の語嵩老人を礼して薙髪、具足戒を受け嵩眉和尚に参じて印可を受け、慈雲寺に住した。世寿七十、僧臘四十で没した。

### 行之顯篤

そのほか破山海明の法系には属さず、木陳道忞の法嗣、芥庵琛の弟子に貴陽乾明行之顯篤がある。

行之顯篤の伝は『会燈録』巻三の平陽下芥庵禪師法嗣の条下にある。顯篤は西蜀李氏の子。乱世によって黔に入り余山禪師を礼して祝髪、遍参し江南に遊び蒋山に至り、芥庵和尚に参じて印証を受けた。

### 祖融法印

そのほか壁林門下で貴陽で活躍した僧に貴陽観音梵行伝性、貴陽興国祖融法印、貴陽白雲西識清見らがある。

祖融法印の伝は『会燈録』巻七の曹洞三十一世雲門下第四代、月印慶禪師法嗣の「宿士類」の条下にある。祖融法印は蜀の李氏の子。披髪は未詳であるが、華山三昧和尚より具足戒を受けた。明の万暦年間(一五七三—一六一五)紫衣を下賜された。興国寺に住して老いを迎え、疾なくして坐脱した。世寿六十三、僧臘記さず。

## 梵行伝性

梵行伝性の伝もまた『会燈録』巻七の曹洞三十一世雲門下第四代の「宿士数」の条下にある。梵行伝性は普陽の人、会城興国寺において祖融和尚を礼して披剃、具足戒を受けて衣鉢を伝え、初め毗尼寺に、後、観音寺に住して終った。世寿七十三、僧臘四十余という。

## 西識清見

貴陽白雲西識清見の伝も『会燈録』巻七の曹洞三十一世雲門下第四代の条下にある。

西識清見は楚の王氏の子。法中和尚によつて披剃、『金剛経』を持誦した。靈藥和尚に参じて印証を受けた。貴陽白雲寺に開法し、終老した。

## 慧林如英

最後に楚眼裏に嗣法した貴陽法華慧林如英について述べよう。

慧林如英の伝は『会燈録』巻七の楚眼裏禪師法嗣の条下にある。慧林如英は潭州（湖南省長沙市）梁氏の子。浙江の天童寺において心応和尚より剃髪。後、行脚して楚に帰り、瀟山において具足戒をうけ、後、楚眼裏より印可を受けた。後、馬苗の宝華寺に住し、ついで法華寺に遷り、寺を再建した。金城南関の衆が師の徳を慕い大士庵に迎えた。

## 六、結言

貴州省の北部に革命の聖地といわれる遵義市がある。明の万曆二十九年（一六〇一）、播州宣慰司が置かれ、四川に属していた。治所は現在の遵義市である遵義府で、遵義府の境域は、遵義市、桐梓・綏陽・仁懷・正安・赤水・羽水などの県であった。清の雍正七年（一七二九）貴州に属した（『辞海』地理分冊、二九一頁。上海辞

書出版社、一九八二年二版)。

遵義は四川省と貴州省を結ぶ交通の要衝であり、四川省の成都から資陽、資中、中江、隆昌、瀘県、納溪を経て貴州省に入り、赤水、羽水、桐梓を経ると遵義に達する。また納溪から叙永、畢節、黔西、清鎮を経ると貴陽に達する。このように四川省と遵義、貴陽は極めて密接な交通路によって連絡していたのである。もちろん道路には山あり江ありで往還は容易ではなかったと思われるが、交通路があり、政治的、経済的にも四川省と深い関係があったことがわかり、遵義が四川に帰属していた時期があったことも首肯できる。

このため貴州の仏教は四川の仏教からの伝入と、雲南や湖南からの仏教の流入の経路があったと思われるが、『黔南会燈録』の僧人たちの十中の八・九が四川出身僧であったことを考えると、四川の仏教が貴州へ伝入したことは明らかな事実である。本論文において貴陽の黔靈山の仏教を述べたのはその一端を明らかにするためであった。

従来、中国仏教史の研究というと、隋唐時代までは主として長安、洛陽を中心とする黄河流域の仏教の研究に重点が置かれた。五代になると江蘇、浙江や福建、広東の仏教も視野に入り、宋代以後、禪宗の全盛期になると、江南地方はもちろん、江西、湖南、湖北の仏教が研究対象として重視されるに至った。しかし、貴州とか雲南の<sup>(四)</sup>仏教についてはほとんど顧みられることはなかった。研究書としては陳垣氏の『明李滇黔仏教考』(中華書局、一九八九年四月)があるにすぎない。この書は抗日戦争の時期に書かれたもので、明末清初の雲・貴両省の仏教の発展状況を述べた稀有の書である。

私は中国仏教史の全体像を理解するためには地方の仏教史や仏教の文物<sup>(五)</sup>に深い関係を持つことが必要不可欠であることを痛感しており、将来は地方の仏教史や仏教文物についての著述を書きたいと考えている。その一環として本論文において貴州の仏教を取り上げた次第である。

(一) 拙稿「雲南・雞足山の仏教」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』第一号、一九九八年三月)。

(二) 黔靈山及び弘福寺の概況については、『中国名勝辞典』(上海辞書出版社、一九八一年十月) 九四五頁。貴州旅游文史系列叢書・貴陽卷『秀甲黔中』(貴州人民出版社、一九九七年十二月)に収録された「黔南第一山―黔靈山」及び「黔中古刹弘福寺」によった。

そのほか黔靈山については、李宗昉撰の『黔記』卷二(『叢書集成初編』中華書局版)に次のように述べられている。

黔靈山、在貴陽城西北三里許、有一峰、蜿蜒從西北來、爲杖鉢峯、水潺潺繞山麓、爲檀山澗、水中峯轟立、即黔靈正峯、山口有楊柳泉、甚清冽、又進有天生石橋、翠竹掩映、過此則宏福寺也、寺北一小徑、可通樵牧、即大羅木村、村前有溪、抱山後、折而東轉、有岫參天、昂藏回首、乃獅子巖也、巖下有峒、洞下有溪、皆名檀山、自寶塔峯右、特起一嶺、自南而東、綿亘內向、與師子巖對峙、如雙闕者、象王嶺也、又其外、則師子山、昂伏爲案、上有雲蓋三臺、縹緲天際、登象王嶺、望貴陽城郭、歴歴如指掌、山後可眺聖泉、

また貴州巡撫長白愛必達撰の『黔南識略』卷一にも次のように述べられている。

黔靈山在城西北三里、衆山環抱、一徑斜穿、叢林古刹、爲游覽之勝、康熙時、石阡郡守陳奕禧鐫黔靈勝境於絕壁、

(三) 撫黔使者西河于準鑒定、木郡程春翔集山甫較閱、江南布衣朱鈴參訂、淨林何素儒芝山氏輯『黔靈山志』卷之二。『黔靈山志』の何素儒芝山氏の叙文によると、この叙文は清の康熙三十七年(一六九八)正月に書かれているので『黔靈山志』は一七世紀末の黔靈山の状況を記述したものであることがわかる。なお本論文で使用した『黔靈山志』は東洋文庫所蔵本によった。記して感謝の意を表する次第である。『黔靈山志』に関する情報を御教示頂いた東京大学東洋文化研究所図書室の笠井伊里氏に対しても御礼申し上げます。また資料の入手については、本学図書室の御高配を受けた。記して感謝の意を表する。

(四) 『黔靈山志』卷之二、勝概、山水

貴州・黔靈山の仏教(鎌田)

靈山秀水、実主巨区故、南海之補陀、山右之五台、蜀中之峩眉、青陽之九蓮、皆為聖蹟所託、彼黔靈者、崑然傑出、秀絶塵表、悉具西來大意、宜為僧伽供奉、山水映帶、足徵勝境、故志之、

- (五) 弘福寺の現況については、千山『仏教名山遊記』(明星国際出版公司、一九九四年二月再版)の「靈山翠繞宏福寺」の条を参照して記述した。なお、『黔記』卷二は、弘福寺について「宏福寺、為赤松和尚建、和尚名道領、浙江人、後遷長沙、又移蜀中、居潼川、姓韓、父中軒母謝氏、和尚生而好佛、不茹葷飲酒、明末、避亂至黔、為杜氏、後棄儒業、投靈藥和尚、剃為僧、游滇蜀歸、遂闢黔靈山、為祖師云、」と述べている、

- (六) 『黔南会燈録』の禪門の地方的な性格については、長谷部幽蹊『明清仏教教団史研究』(同朋舎出版、一九九三年四月)第十二章「禪門伝燈の統合と分化」五一七―二二頁参照。

- (七) 『黔靈山志』卷五の「赤松領禪師題歷代老人像贊」の中に「九峯山靈藥和尚像贊」がある。

天童山裏得心印、戒律禪宗理真実、隻杖遊滇開九峯、人天随処展法席、相伝澧州出七仏、吾師産彼賦寄質、雖是不同七仏□、九峯初祖却居一、

- (八) 拙著『中国仏教史』第六卷(東京大学出版会、平成十一年)四六八―九頁。

- (九) 『黔靈山志』卷五

白雲西識業師像贊

楚陽生長濶戈鋌、解脱能為忍辱仙、拋尽家私無挂礙、了明生死不相干、白雲一塢堪投足、皓月千峯独坐禪、動靜心堅如鉄石、懸巖撤手任名傳、

- (一〇) 『黔靈山志』卷五

慈雲本山敏老和尚像贊

潼川貴族質尤奇、遁跡山林世罕知、七坐道場功業大、謬蒙付託強撐持、

- (一一) 拙稿「雲門文偃と大燈国師―その遺誠を中心として―」(正眼短期大学創立四十周年記念論集『禪と人間』大東出版

社、平成六年十月)。

(一二)『善一如純語録』禾州普明逸樵超嶼撰の序(『中華大藏經』第二輯第七八冊、修訂中華大藏經会印行、中華民國五十七年春)。

黔地向聞無佛法也、今若是疇謂黔無佛法乎、純公黔人也、自居學地、便負逸群志、矢兼濟願、已而徧參吳越楚蜀、凡諸名望宗匠、莫不親披運斤之風、仍反黔中、習安道俗、遂翕然相推戴、不減西河之於昭叟也、初出世住普陽之天龍、次遷松嶺、惟務以本分鉗錘激勵來學、其接人也、機徑截而不涉廉纖、其說法也、語渾璞而不事雕琢、故能感貴筑三十余城、靡不響道皈信、所謂居人所不居之邦、弘人所難弘之法、今於純公見之矣、純得法於善權位、位嗣月幢了、了嗣丈雪醉、醉嗣破山明、明嗣天童悟、其源清流潔、根大叢繁、夫復何言、

(一三)陳垣『明李溥黔仏教考』(中華書局、一九六二年七月第一版)「明季黔南燈系表」三〇―三五頁。

(一四)雲南の南詔国の仏教については、拙著『中国仏教史』第五卷(東京大学出版会、一九九四年六月)第四章「隋唐仏教の外縁」第二節「南詔国の仏教」参照。

(一五)たとえば北齊時代でも鄴都の仏教のみでなく青州の仏教の重要性については、宿白「青州竜興寺窖藏所出仏像的几个問題―青州城与竜興寺之三」(『文物』一九九九年第一〇期)参照。

## Summary

### Buddhism of Qian-ling-shan in Gui-zhou

Shigeo Kamata

貴州・黔靈山の  
仏教（鎌田）

There are several sacred places of Buddhism, like Fan-jing-shan, Jin-ding-shan, and Qian-ling-shan, in Gui-zhou, China. In these sacred places of Buddhism, which were established in Ming/Qing era, there are many temples, to which many Buddhist believers came to worship from such surrounding regions Si-chuan and Yun-nan.

In this paper, taking the Buddhism of Qian-ling-shan of these sacred places of Buddhism as my subject, I describe the history and present status, the life and thought of the priest Chi-song-he-shang, who was the founder of the Hong-fu-si temple of Qian-ling-shan, and the Zen priests of Gui-yang recorded in *Qian-nan-hui ding-lu*.

In my second section "Qian-ling-shan, the sacred place of Buddhism in Gui-zhou".

I describe the nature, scenery, ruins, beautiful places etc. mainly by the use of copy of *Qian-ling-shan-zhi* owned by Toyobunko, Tokyo.

In Qian-ling-shan, there is Hong-fu-si, the largest temple in Gui-zhou. In my third section I delineate the history and present status of this temple.

The founder of Hong-fu-si was Chi-song-he-shang. Since we have biographical material on him, I describe his life and thought in my fourth section, "The life and Thought of Chi-song-he-shang". I establish that he was an excellent Zen priest; not only was his thought profound, but also his life itself was brilliant.

元 Since the lineage of the successive chief priests of Hong-fu-shan is not clear, I describe the lives of the Zen priests of Gui-yang in my fifth section, The Zen of Priests of Gui-yang, recorded in *Qian-nan-hui-ding-lu*. "Almost all the life records of Chinese Zen Buddhists concepy those in regions like Jiang-su, Zhe-jiang, and Hu-nan, not

those who stayed in Qian/Gui-zhou. Only *Qian-nan-hui-ding-lu*, by Shan-yi-ru-chun, contains the lives of the Zen priests of Gui-zhou. This is the reason why I searched for the lives and activities of the Zen priests who were active in Gui-yang, where Qian-ling-shan is located, by means of this volume.

Even though it is certain that Gui-zhou and Si-chuan are closely related politically and economically, and that they had developed transportation systems between them, how about the history of Buddhism? This paper makes it clear that the Buddhist priests in Si-chuan and Yun-nan played a great role in the organization of Buddhism in Gui-zhou.

Now that I have finished writing the sixth volume of *The History of Chinese Buddhism*, only the seventh and the eighth volumes remain unfinished. It seems to me that the historical current of Chinese Buddhism will be clarified to a certain degree by the completion of these eight volumes. However, it is a history of Buddhism focused on the central district, the center of political authority, the history of Buddhism in the local regions has not yet become evident.

The only Chinese scholar who has delineated the history of Buddhism in the Dian-Qian region is Chen-yuan, whose work, *Ming-ji-Dian-Qian-Fo-jiao-Kao* (A research onto Buddhism in Dian-Qian in the late Ming Era) was published by Zhong-hua Book Store in April, 1989.

I have continually been paying attention to the history of regional Buddhism and Buddhist writings in order to acquire the whole insight of the history of Chinese Buddhism. After the completion of all eight volumes of *The History of Chinese Buddhism*, I would like to write a technical book on the history of regional Buddhism, Buddhist writings, Buddhist ruins, and so forth. This is the reason why I have considered Buddhism in Gui-zhou considered.